

内在化・外在化問題における子ども自身の認識と親の認識

多値型 IRT を用いた SDQ の特異項目機能(DIF)

○岩田 昇 (広島国際大学心理学部)・熊谷龍一 (東北大学)・佐伯いずみ (広島市スクールカウンセラー)

キーワード: SDQ, 評定者, 項目反応理論(IRT), 特異項目機能(DIF)

目的

ADHD などの子どもの行動上の問題は広く認知され早期に問題保有の可能性を捉え、適切な対応を執ることが、対処の重要であると考えられてきた。このような目的で使用できるツールに Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ; Goodman, 1997)がある。SDQ は3~16 歳くらいまでの子どもの内在化・外在化問題を測定するための国際標準ツールで、「問題行動」「多動・不注意」「情緒不安定」「仲間関係問題」「向社会的行動」の各 5 項目で測定する 5 下位尺度計 25 項目で構成されている。

10 歳未満の子どもの問題に対しては、親(主に母親)や教師による評価に基づく研究報告が一般的である。しかし、両者の評価が一致するとは考えにくい。SDQ でもこの評定者の評定値を用いた研究報告は発表されているが、この評定者間のギャップについて十分に検討されているとは言い難い。そこで本研究では、一般公立小学校児童およびその保護者(父・母)から独立に得た SDQ 評定データに多値型項目反応理論(IRT)分析を適用し、子どもの内在化・外在化問題の評価における子ども・父・母間の評定

Differential Item Functioning indices of individual SDQ items (Index K)

	Conduct Problems		Hyperactive/Inattention		Emotional Problems			
	Family	Parents	Family	Parents	Family	Parents		
Temper	.218 *	.115	Restless	.294 *	.247 *	Somatic	.229 *	.049
Obedient*	.224 *	.119	Fidgety	.157	.078	Worries	.326 *	.017
Fight	.225 *	.010	Distractible	.177	.109	Unhappy	.375 *	.069
Lies	.083	.015	Reflective*	.249 *	.051	Clingy	.693 *	.057
Steals	.142	.031	Persistent*	.193	.082	Fears	.120	.116

Headings indicate the comparison raters for DIF detection according to index K.

Family indicate children and Parents (fathers, mothers).

*: index K > 0.20, indicating a meaningful DIF among/between raters.

方法

(1) 調査協力者

2016 年 9 月下旬~10 月上旬, A 県内 4 地域 8 公立小学校 5・6 年生およびその保護者・担任教師に調査を行い、児童 541 名(男子 283・女子 258)に関する回答を得た。

(2) 調査手続き

a 児童調査: 担任教師より調査票を配布し、クラス内で記入後、個別の封筒に入れ回収した。b 保護者調査: 各児童が父親・母親用調査票・封筒を自宅に持ち帰り、父・母親は個別に記入・封印し、児童が学校に持参した。この方法により、各々の回答内容の機密保護を図った。c 教師調査: 担任クラスの各児童に関して教師用 SDQ への記入を求めた。多くの小学校で短縮版が用いられた。

(3) 統計解析

児童・父親・母親評定の SDQ 下位尺度「問題行動」「多動・不注意」「情緒不安定」の回答データに多値型 IRT の Graded Response Model (GRM)を適用した。得られたパラメタに基づいて、家族(子ども・父・母)内での特異項目機能(DIF), なら

びに父母間での DIF の有無を検討した。

(4) 倫理的配慮

本研究は広島国際大学心理学部倫理小委員会による承認を得て行われた。実施に際しては、各学校長の同意を得たのち、研究趣旨・プライバシー保護等の倫理的配慮を児童・保護者に周知し同意を求めた。

(5) 利益相反開示

発表に関連し、開示すべき利益相反関係事項はない。

結果

GRM 解析の結果、子どもの自己評定の識別力・閾値は父・母評定のそれとかなり差異が見られたが、父・母間では顕著な差は見られなかった。Index Kに基づく DIF 検出法(熊谷, 2012)を適用した結果、子ども・父・母の 3 評定者では、問題行動 3 項目、多動・不注意 2 項目、情緒不安定 4 項目で DIF が検出された(下表)。一方、父・母間では、多動・不注意の「落ち着きがない」項目のみで DIF の存在を認めた。

考察

SDQ の DIF 検討は、欧米でも報告されておらず、本研究が初めての報告である。親子間での DIF は内在化問題(情緒不安定)で顕著に認められた。外在化問題(問題行動ならびに多動・不注意)でも DIF は見られたが、内在化問題に比べると軽度であった。一方、父・母の評定における DIF はほとんど検出されず、各次元を評定する際の父・母の認識はほぼ一致していることがうかがわれた。

(IWATA Noboru, KUMAGAI Ryuichi, SAEKI Izumi)